幻想郷のリィンカーネーション

朱色の羊

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の手違いで死んだ学生安心院（あじむ）　弦（げん）は過去の名だたる人物をその身に宿す事が出来る道具【輪廻の枝】を授かり幻想郷へと降り立つ…

彼の周りで起こる出来事を綴る日常のお話…

目次

0話　転生 ―― 1
幻想郷の日常
1話　初めての輪廻返り（りんねがえり） ―― 5
2話　博麗神社 ―― 10
3話　人里 ―― 16
4話　訪問者 ―― 20
5話　紅魔館 ―― 25
6話　半霊剣士との出会い ―― 30
7話　決闘 ―― 35
設定1 ―― 40
間話　インタビュー ―― 45
8話　占い師 ―― 49
輪廻異変
9話　災厄と栄光 ―― 55
10話　神社の戦い ―― 60
11話　会議 ―― 71
12話　紅魔の戦い ―― 85
13話　竹林の戦い ―― 95

0話　転生

弦『ん、ここは…？』
気がつくとやたら眩しく輝く雲の上の様な場所にいた
周りには何も無く…いや、1つだけある
目の前で老人が土下座していた
弦（なにこれ…？）
？「すまん！いや、本っ当にすまん！」
弦『あの…まず頭を上げてください、そして貴方はどなたですかね…？』
？「これは失礼した、わしは神様じゃよ」
弦『はぁ…神様が俺に何の御用で謝っていたので…？』
神「実は君をわしの手違いで死なせてしまっての…
本当に申し訳ない…」
弦『あぁ…やっぱり俺は死んだんですね』
神「気付いておったのか…？
というより死んだというのに随分落ち着いておるのう…」

弦『こんな場所は地球上には無いですし…死んだ実感がわかないからですかね？』
（そもそもあのトラックが突っ込んできた時覚悟はしてたしね…）
神「そうか…取り敢えず立ち話もなんじゃ、茶でも淹れよう」
神様が手を横にかざすとちゃぶ台と淹れたてのお茶が現れる
弦『あぁ…どうもありがとうございます』
神「いやいや、わしが手違いなど起こさなければ君はここにはいないんじゃ…
気にせんでおくれ」
弦『そうですか…
そういえばここは何処なんです？』
弦は茶をすすりつつ聞く
神「ここは死後の世界の一歩手前の場所じゃ、実は君に話があっての」
弦『話？』
神「実は君はまだ死ぬ予定では無かった、これは分かるじゃろ？」
弦『先程手違いでと言っていましたしね、それがどうかしたんですか？』
神「うむ、君が予定より早く死んでしまったのでまだ死後の世界に君の場所が無いんじゃ、かといって元の世界へは帰す事が出来ん…
そこで君を転生させようと思うてな」

弦『転生ですか？』
神「うむ、それに対しての願いも可能な限り答えるぞ」
弦『分かりました、生き返るだけでもありがたいですし…
感謝します』
弦は深く頭を下げた
神「良い子じゃなぁ…
行き先は東方ｐｒｏｊｅｃｔとやらの世界じゃ」
弦（東方ｐｒｏｊｅｃｔか…多少は知っている世界だ
でも本当に少しの事しか知らないな）
『では願い事を言っても良いですか？』
神「うむ、遠慮せずに言うと良い」
弦『では…
【リィンカーネーションの花弁】という漫画に出てくる輪廻（りんね）の枝を全ての才能を複数同時に使えるようにしてください、それと外見を変えて欲しいです。』
神「枝は護身や戦闘用だと分かるが…外見は何の為に？」
弦『せっかく他の世界に行くなら姿を変えて新たな自分をと思いまして…』
神「なるほどのぅ…分かった

少し待っておれ」
神様の両手が光だし光が収まるとナイフの柄に木の枝が絡んだ様な外見のものが現れる
神「お望みの枝じゃ、外見はどうしたい？」
弦『そうですね…』
弦は枝を受け取りつつ考えこむ
弦『神様にお任せします』
神「分かった、では向こうに送るぞ？」
弦『はい、色々とありがとうございました』
神様が手をかざすと弦は光りやがて消えたのだった

幻想郷の日常

1話　初めての輪廻返り（りんねがえり）

弦『う～ん…
ここは…？』
弦が目を覚ますと湖の辺りにいた
弦『あぁ…そっか俺死んで幻想郷に来たんだった
そういや変えてもらった外見どうなってんだろ？』
弦は起き上がり湖に姿を映した。
そこには腰まで伸びた金髪を一つに纏め、黒いズボンにシャツの上から白いコートを羽織ったオッドアイの男がいた
弦『随分変わったなぁ…
両目も赤目と青目だし、元の俺の面影は何処にも無いや…』
？「そこに誰かいるのかー？」
背後から声が聞こえ弦が振り返ると金髪に赤いリボンをつけた幼女が立っていた
弦（この子は…ルーミアだったか？

たしか…人食い妖怪だったはず）
ル「もしかしてお兄さんは食べても良い人間？」
弦（うわ…実物は可愛いけど怖いな…）
『えっと…勝負しません？』
ル「良いよ、私が勝ったら貴方を食べるのだー」
弦『さて…初めてだけど上手く使えると良いが…』
弦は枝を構えると刃を首に当てそのまま首を掻き切った
ル『えっ…!?』
驚くルーミアを他所に、枝は崩れ消え弦の首からは血で無く花弁が舞っていた
弦『輪廻返り（りんねがえり）…
初めてだけど上手くいったみたいで良かった』
そう呟く弦の髪と瞳は黒くなり、服も黒い着物をはだけさせさらしを腹に巻いた姿に変わっていた
弦『記念すべき最初の輪廻返りは剣聖【宮本武蔵玄信（みやもとむさしはるのぶ）】！
来ませい、腹削ぎ！首刈り！』
弦が叫ぶと首から舞っていた花弁が刀身の黒い刀と白い刀を形作り弦の両手に握られる

ル「姿が変わって刀を持ったぐらいどうって事ないのだー！
月符〈ムーンライトレイ〉！」
弦『歪二天礼法〈十色屍〉！』
弦はルーミアが放った弾幕を十の連斬撃を放ち全て切り防ぐ
ル「なっ…!?」
弦『次は此方から行かせてもらう！
歪二天礼法〈相抜〉！』
ル「ひぃっ…!?」
弦が殺気を放つとルーミアの目に大量の刀を突きつけられている幻覚が映る
弦『どうだ…？
これでもう動けまい？』
ル「刀なんて怖くもなんともない…
怖くない筈なのに…身体が動かない…」
弦『さぁどうする…？』
ル「うぅ…降参なのだー」
ルーミアが涙目で降参を告げると弦は相抜を解く
ル「こ…怖かったのだー」

弦『相抜は死の重圧を刀として顕現させる技、死を恐れる限りは動けなくなる…』
元の姿に戻り地面に落ちた枝を拾いながら言う
ル「そんな事が出来るなんて…貴方本当に人間？」
弦『人間ですよ、過去の名だたる人物の力を使えるだけの外の世界の人間です』
ル「へぇ…
外の世界の人間はそんなに強いんだ？」
弦『多分人それぞれでしょうね』
ル「あ、自己紹介がまだだったね
私はルーミア、敬語でなくて良いよ」
弦『そう？
俺は安心院　弦、弦で良いよ』
ル「よろしくね弦、弦はこの後どうするの？」
弦『う～ん…どうしようかな？
此処に来て最初にやる事ってなんだろう？』
ル「なら博麗神社に行こう、外来人なら最初に行く所だよ
案内するけど、弦は空飛べるの？」
弦『試してみる…

輪廻返り【ライト兄弟】！『
弦が輪廻返りをすると頭にゴーグルが現れ両腕が翼になった
ル「腕が翼に…
本当に外の世界の人間って凄いんだね」
弦『これは外の世界の人間でも不可能だよ』
呟きながらも弦は両腕の翼を羽ばたかせルーミアに案内されながら博麗神社へ向かうのだった

2話　博麗神社

ル「着いたのだー」
弦『ここが博麗神社？』
ル「なのだー！」
弦とルーミアが言葉を交わしつつ博霊神社の境内へと降り立つと奥から2つの人影が向かって来た
？「誰かと思えばルーミアじゃない、貴方が此処に来るなんて珍しいわね」
？「よぉルーミア、久しぶりなんだぜ…
っと…隣の奴は誰だ？」
弦『初めまして安心院　弦と言います
今日幻想郷に来た者です』
？「って事は貴方外来人なのね
私は博麗霊夢、霊夢で良いわ
それで隣が…」
？「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ！」

弦『よろしくお願いします、霊夢さん、魔理沙さん』
霊「呼び捨てで良いわよ、私も弦って呼ぶから」
魔「右に同じだぜ！」
弦『分かったよ
宜しくね、霊夢に魔理沙』
ル「弦は凄い強いんだよ、多分魔理沙にも引けを取らないと思う」
魔「へぇ…？
それは聞き捨てならないのぜ
おい弦、私と勝負しようぜ」
弦『別に構わないよ』
２人が勝負をする事になり、霊夢とルーミアが少し離れた位置まで移動する間に弦は枝を取り出した
魔「そんなチンケなナイフ、怖くもなんともないのぜ！」
弦『あっそ…』
弦は魔理沙の言葉を聞き流しながら枝を使い喉を掻き切った
霊・魔「「えっ…!?」」
弦『輪廻返り【シュレーディンガー】！』

驚く霊夢と魔理沙を他所に輪廻返りした弦の頭は白くなり猫耳が生えていた
魔「いきなり喉を切られて驚いたが…無事なら問題ないのぜ！
恋符〈マスタースパーク〉！」
しかし魔理沙が放った弾幕が弦に当たる事は無かった
魔「外れた…？
いやそんなはず…」
弦『どうした？
まさか今ので終わりでは無いだろう？』
魔「くっ…
魔符〈ミルキーウェイ〉！」
しかしまたもや魔理沙が放った弾幕は弦にかすり傷一つ負わす事は無かった
魔「なんで…なんで当たらないのぜ!?」
弦『もう終わりかな？
ならば次はこちらからいかせて貰おう』
弦はそう言うと足元に転がっていた石ころを拾い上げた
魔「そんな石ころ当たった所で痛くも痒くも…」
弦『それはどうかな？』

弦はそう呟きながら魔理沙がいる方へ石を放り投げた
魔「がふっ…!?
きゅう…」
投げられた石ころは魔理沙の額に見事に命中し、魔理沙はそのまま気絶してしまった
弦『ふぅ…
なんとか勝てたな…』
輪廻返りを解いた弦は疲れた様な声で呟く
霊「そうは言うけど…
魔理沙に勝つとか相当の実力者よ?」
弦『はは…俺じゃなく俺が宿した人物が凄いんだよ』
霊「宿す…
ってことは貴方の能力は降霊みたいな物なのかしら?」
弦『それを話す前に魔理沙を起こすかな…
輪廻返り【ナイチンゲール】!』
再度輪廻返りをし、看護師の姿になった弦が魔理沙に手をかざすと傷が瞬く間に消えた
魔「う〜ん…

はっ…勝負は!?どうなったのぜ!?」
霊「目が覚めたようね、貴方の完敗よ」
魔「うぅ…悔しいのぜ…」
霊「さて…魔理沙も目を覚ましたしお互いの能力を教え合いましょうか
私は《主に空を飛ぶ程度の能力》よ」
魔「私は《魔法を扱う程度の能力》なんだぜ」
ル「私の能力は《闇を操る程度の能力》
弦の能力はなんなのだー?」
弦『そうだな…
俺の能力はさしずめ《歴史上の人物の才能を扱う程度の能力》…ってところだ』
霊「なにそれ…?」
弦『文字通り外の世界で歴史に名を残した人々の能力を扱えるのさ』
ル「私との勝負で使ったのも?」
魔「今の勝負で使ってたのも外の世界の才能なのか?」
弦『その通り、まだ十数人分はあるんだけどね』
霊「なにそれ…
あんなのがまだ数十人分とかもはやチートじゃない…」

そうして４人は明るく和気あいあいと雑談を続けるのだった

3話　人里

弦と魔理沙の戦いが終わり半時が経った頃不意に霊夢が言う
霊「それにしても弦の能力って便利よね
魔理沙の攻撃を凌ぐばかりか倒しあまつさえ回復まで出来るんだから」
魔「今後の異変解決者に加わって欲しい所なのぜ」
弦『買いかぶりすぎだよ…
それにまだあまり慣れてないしね』
霊「まぁ異変なんて起こって欲しく無いし良いんだけどね」
魔「平和が一番なんだぜ！
そうだ、弦はこの後どうするのぜ？」
霊夢の問い掛けに弦は少し考え込み呟くかの様に言った
弦『此処に来る途中人里っぽいのがあったしそこに住まわせて貰おうかな…』
霊「それなら人里を管理してる慧音に言わないとね」
弦『へぇ…そんな人いるんだ？』
（まぁ…知ってたけど）

ル「それじゃ、私が案内するのだー」
弦『ルーミア！
ちょっと待って！』
言うが早いか走り去って行ったルーミアを追いかけ弦は境内から姿を消した
弦『ここが人里か…
空から見た時も思ったけど随分と賑わってるな』
ル「賑わってる方が楽しいのだー！」
弦『否定はしないけど…
俺は静かな方が好きだな…』
ル「そーなのかー？」
そんな他愛もない会話を2人がしていると道の向こうから1人の女性が現れた
？「おや、ルーミアじゃないか
こんな時間に人里にいるなんて珍しいな」
ル「あ、慧音先生
実は新しく来た外来人を案内してたのだー
人里に住みたいんだって」
慧「なるほど外来人か、まぁ物件は余ってるから好きに使ってくれ

自己紹介がまだだったな、私は上白沢　慧音、慧音で良いぞ」
弦『ありがとうございます
俺は安心院　弦といいます、弦と呼んで下さい』
ル「良かったね、弦」
慧「それにしてもルーミアが人に優しくするとはな…
珍しい事もあるものだ」
ル「むー…
私だってたまには優しくするのだー」
ぷくーと可愛らしく頬を膨らませたルーミアを見て弦は
（こうして見ると人食い妖怪には見えないなぁ…）
などと呑気な事を考えながら歩を進めた
弦『ここか…
割とでかいな…』
ル「大きいのだー」
紹介された物件までたどり着くと割と大きめの家があった
中に入ると大きさが一際引き立つ
弦『まぁ大きいに越したことは無いし…

良しとするか…』
ル「なのだー
あ、私はそろそろ帰るのだー」
弦『あぁそう?
案内ありがとね』
ル「どういたしましてなのだー」
ルーミアは笑いながら家を飛び出して行った
弦『取り敢えず…
寝よっと…
…Zzz』
弦は横になると数秒後には寝息を立て始める弦を上空から見ている人影があった
?「あやや、まさか魔理沙さんに勝つとは…
あの外来人強いですねぇ…
これは言いネタになりそうです!」
そう言い残し飛び去った謎の人影のせいで魔理沙に勝つ程に強い外来人が幻想入りして来たと幻想郷中に噂が広まる事を弦はまだ知らなかった…

4話　訪問者

弦が幻想入りして数日が経ったある日
博霊神社には霊夢と魔理沙、そして日傘をさした羽の生えた少女がいた
霊「それで？
貴方が此処に来るなんて珍しいわね、レミリア」
魔「まったくだ、一体どんな風の吹きまわしなのぜ？」
レ「最近来たというこの外来人に会ってみたくてね
これによると随分強いそうじゃない？」
そう言いながらレミリアは手に持っていた新聞を取り出した
霊「これって…あの天狗の新聞ね？
よくもまぁこんなガセネタだらけの物読むわね…」
魔「でもまぁ…今回はガセネタではないようなのぜ
うわっ…私に勝った事まで書いてある…
いつから撮ってたんだ？」
？「あの外来人がここに来た辺りですね」

3人が声がした方を向くと1人の鴉天狗が降りてきた
文「どうも！清く正しい射命丸です！」
霊「清いとかどの口が言うのやら…
まぁ良いわ、どうせ彼の家知ってるんでしょ？
案内しなさい」
文「お安い御用です！
丁度私もあの方の家を訪ねようかと思っていたので！」
そう言いながら4人は人里にある弦の自宅へとやってきた
霊「弦ー？いるー？」
弦『はいはい、どなたですかーって…
なんだ霊夢達か』
魔「なんだとはとんだご挨拶なのぜ」
弦『すんませんでしたーっと…
そこの天狗と吸血鬼は初めて会いますね
取り敢えず中へどうぞ』
文「失礼致します！」
レ「お邪魔するわね」

自宅に4人を招き入れた弦は茶を淹れ皆に出し座った
レ「自己紹介させてもらうわね
私はレミリア・スカーレット、紅魔館の主よ！」
弦『紅魔館…？』
（確か…吸血鬼の屋敷だったっけ？）
魔「吸血鬼屋敷なのぜ！」
弦『へぇ…』
（やっぱりか…）
文「私は清く正しい新聞記者の射命丸　文と申します！」
弦『2人共とご丁寧にどうも、俺は安心院　弦といいます
レミリアさん、文さん、宜しくです』
文「敬語で無くても良いですよ」
レ「私も、レミリアと呼ぶことを許可するわ」
弦『そう？じゃあそう呼ばせてもらうよ
あ、そういえば今日は何用で家に来たの？』
文「私は来たばかりの外来人の取材です！」
レ「私は貴方に興味があって来たの

貴方随分と強いらしいわね？」
弦『う～ん…
よく分からないけど少しは強いんじゃ無いかな？』
霊「十分強いわよ…
なにせ魔理沙を一撃だもの」
魔「しかも私のマスパを凌いだしな！
幻想郷でも強いほうだと思うのぜ！」
レ「魔理沙を一撃…
ふふっますます興味が出たわ、貴方明日紅魔館に来なさい」
弦『えっ？なんでまた急に…』
レ「どれぐらい強いのか気になったからね、家のメイドと戦ってもらうわ」
弦『まぁ…どうせ暇だし良いけど…』
レ「それじゃ明日待ってるわよ」
レミリアが話終えた瞬間隣に座っていた文が手を上げた
文「その勝負見に行っても？」
弦『構わないけど…なんで？』
文「こんな面白そうで良いネタ見逃す道理はありません！」

弦『あぁそういう事ね、レミリアは大丈夫なの？』
レ「ええ、私は一向に構わないわよ」
弦『それじゃ決まりだな』
そして数時間が経ち霊夢達４人は帰っていき弦は翌日の戦いに備え早めに眠りにつくのだった

5話　紅魔館

日が登りきった昼頃、弦は文に案内されやたらと紅(あか)を強調してくる館の前にいた
弦『ここが紅魔館か…
想像以上に紅いな』
弦が館を見上げていると扉が開きメイド服に身を包んだ1人の少女が姿を表した
？「ようこそ紅魔館へ
私はここのメイド長をしています十六夜　咲夜です」
弦『これはご丁寧にどうも
俺は安心院　弦、弦って呼んで下さい』
咲「それでは中へどうぞ
お嬢様がお待ちです」
咲夜に連れられ中へ入ると外見よりも紅いロビーの中に昨日出会った吸血鬼が立っていた
レ「待っていたわよ弦
早速で悪いんだけど貴方がどれほど強いのか見せてくれないかしら？」

弦『了解、それで相手は？』
レ「咲夜、頼めるかしら？」
咲「かしこまりました
それではこちらにどうぞ」
レ「それじゃ天狗、私達は向こうで観戦しましょ？」
文「弦さん、良いネタになる事期待してますよ！」
咲夜に招かれ２人はロビーの中央まで移動し、その間にレミリアと文は安全な場所まで避難した
咲「それじゃ…
そっちも準備をなさい」
弦『あぁ…
それじゃ遠慮なく』
弦は懐から枝を取り出すと輪廻返りを行う為喉を一思いに掻き切った
文・レ・咲「「「!?」」」
驚く３人を他所に弦の首からは花弁が舞い、その姿は銀髪になり服もまるで英国貴族の様な物に変わり手には杖が握られる
弦『輪廻返り【ブラド＝ツェペシュ】！』

咲「喉を切られ一瞬戸惑ったけど…
どうやら無事みたいね
こちらからいかせてもらうわよ！」
咲夜が言うやいなや弦を取り囲むようにナイフが現れた
弦『中々やるね！』
言いながら弦は伏せて避ける
弦『次はこっちから行くよ！〈串刺し公（カズイクル・ベイ）〉！』
そう言い弦は手に握られていた杖で床をコンと叩いた
咲「くっ…」
弦が床を叩くと同時に足元から大量のまるで磔（はりつけ）の刑にでも使うかの様な串が現れたのを咲夜は間一髪の所で避ける
弦『今のを避けるか！
だけどまだまだ終わらないよ！』
そう言うが早いか弦は先と同じ様に串をどんどん出していく
咲（避けるのが難しくなってきた…
仕方がないか…）
「幻符〈殺人ドール〉！」

弦『甘い！』
周りに現れたナイフを串を出し防ぎきると今度は咲夜の周りに串を出し猛攻を仕掛けた
咲「くっ……！
降参！」
咲夜が串を避け体勢を崩したすきに串を出し止めを刺そうとするもギリギリで避けられかすり傷を負わせ勝負は幕を閉じた
弦『大丈夫？』
弦は元の姿に戻ると魔理沙の時同様輪廻返りをし咲夜の傷を癒やした
レ「お疲れ様、正直想像以上だったわ」
文「ふふ…良いネタが撮れました…！」
癒やし終えると勝負を観戦していた2人が笑いながら近づいてきた
レ「まさか咲夜に勝つなんてね…
貴方本当に人間かしら？」
弦『毎度聞かれるけど俺は人間だよ』
レ「そう…少し人間の事見直したわ」
弦『そりゃどーも…』

弦は気怠そうに言うとゆっくりと自宅へ戻っていった

6話　半霊剣士との出会い

弦『団子上手い…』
ある晴れた暖かな日、弦は人里にある和菓子屋の軒先で1人団子を食べていた
弦『暇だし何かないかなぁ…
っとあれは…?』
弦が食べ終えた団子の串をくわえぼーっとしていると通りの先に大量の荷物を持った誰かがいる事に気づいた
弦『大変そうだな…
手伝うか』
お会計を済ませた弦が近づくと相手は綿飴の様な何かを従えた刀を2本背負った少女だった
弦『あの…
良かったら手伝います?』
?「え?
あ、ありがとうございます!」

近づいてくる弦に気付かなかったのか、少女は少し驚きながらも礼を口にした
？「いつもより多く買ってしまって…
このままではいつ帰れるか心配だったので助かります！
あ、私は魂魄　妖夢と言います、妖夢で良いですよ」
弦『ご丁寧にどうも、俺は安心院　弦、弦で良いです』
妖「弦さんですね、手伝ってもらってありがとうございます
あの…本当に良いんですか？大分重いですけど…」
弦『大丈夫、少し待っててください』
そう言いながら弦は懐から枝を取り出し輪廻返りした
弦『輪廻返り【アルバート＝デサルボ】！』
輪廻返りした弦は両腕の筋肉が膨張し体格も巨大化した大男になっていて、妖夢が苦労していた大量の荷物を軽々と持ち上げた
妖「姿が…変わった…？」
弦『俺の能力みたいなものなのでお気になさらず』
妖「あ、そうですか…」
まだ少し納得していない様子の妖夢であったが（そういう能力もある）と考え弦を自らの目的地まで案内し始めた

妖「着きました、此処が白玉楼です！」
数十分が経ち2人は目的地までたどり着いた
弦『ほー、大きい屋敷だねぇ…』
弦は運んできた荷物を降ろしながらその大きさに驚いていた
？「妖夢ちゃ～ん？
帰ってきたのー？」
弦が輪廻返りを解いたその瞬間に奥から1人の女性が姿を現した
妖「あ、幽々子様
只今戻りました」
幽「お帰り～
それでそっちの子はどなた？」
弦『あ、俺は安心院　弦と言います』
幽「私は西行寺　幽々子、この白玉楼の主よ～
それにしても…」
自己紹介を終えた幽々子は弦の顔を見ながら考え込む
弦『あの…俺の顔になにか…？』
幽「何処かで見た事が…

あ、貴方もしかして新聞に載ってた最近来た外来人の子？」
弦『えぇ…まぁ』
幽「かなり強いらしいわね～
ちょっと妖夢ちゃんと手合わせしてくれないかしら？」
弦『急ですね…
まぁ構わないんですけど』
幽「そうと決まれば早速…
妖夢ちゃ～ん、ちょっと来てくれる～？」
幽々子がいつの間にかいなくなっていた妖夢を呼ぶと奥の方から足音が聞こえてきた
妖「なんですか幽々子様、お腹空いたんなら夕食まで待ってて下さい」
幽「え～、そんなに待てないわよ～…
っと…今回は違うの、弦くんと手合わせしてみてくれないかしら？」
妖「何故また急に？」
幽「ほら、かなり強いっていう外来人の話知ってるでしょ？」
妖「まぁ…それは
今や幻想郷中で噂ですしね」

弦『それ俺の事なんだよ』
妖「なるほど…
私も噂の外来人の強さには興味があります
こちらからもお手合わせ願えますか？」
弦『良いよ、ただし手加減無しでいくからね？』
妖「望むところです！」
幽「２人共がんばれ～！ボリボリ…
お煎餅美味し～！」
妖「幽々子様…
あとでお説教ですからね…？」
かくして２人の戦いが始まろうとしていた
（ついでにその横で煎餅を貪っていた幽々子はお説教が決まった）

7話　決闘

弦（さて…
妖夢は剣士、それも凄腕だ
正直武蔵だけでは心もとないな…）
『ここは…
あの二人でいくかな』
弦は枝を2本取り出すと一気に喉を掻き切った
弦『輪廻返り【宮本武蔵玄信柳生十兵衛（みやもとむさしはるのぶやぎゅうじゅうべぇ）】！』
輪廻返りをした弦はルーミアと戦った時同様に黒髪黒目の侍の様な姿になっていた
妖「覚悟は良いですか？」
弦『あぁ…やろうか』
妖「こちらからいきますよ！」
妖夢は走りながら弦に近寄り横薙の一閃を放った
弦『ふっ…！』
（見える…この目のおかげだな）

妖「小手調べとは言え今のを躱しますか…
やはり噂に違わぬ強さですね」
弦『そりゃどうも！』
弦はそう言いながら妖夢に駆け寄り縦の振り下ろしと横薙を合わせ十字の斬撃を放った
妖「甘い！」
弦『くっ…！』
が、避けられ反撃に妖夢が放った袈裟斬りを間一髪で躱した
弦（危なかった…
目が無ければ今のでやられてたな…）
妖「もう終わりですか？」
弦『そんな訳ないだろ？
歪二天礼法〈十色屍〉！』
妖「くぅっ…！
餓王剣〈餓鬼十王の報い〉！」
妖夢は弦が放った十の連斬撃をなんとか凌ぐと反撃の斬撃を繰り出す
弦『くっ…

歪二天礼法〈百色屍〉！』
弦はその斬撃を百連撃の斬撃を飛ばし凌ぎ切る
弦『歪二天礼法〈相抜〉！』
妖「なっ…!?」
弦が技を繰り出したその瞬間、対峙した2人の目に大量の刀を四方八方から突きつけられた幻覚が映り込んだ
弦『死と隣り合わせのこの光景の中…
根比べといこうじゃねーの？』
妖「望む…所です！」
2人は大量の汗をかき息を切らし、極限状態の中ただただ耐えていた
そして数十分が経った頃…
妖「もう…限界」
先に倒れたのは妖夢だった
弦『…勝てた』
弦は技と輪廻返りを解き倒れた妖夢を布団まで運び介抱した
妖「う～ん…

ここは…？」
弦『おう、目が覚めたみたいだな』
数時間が経ちすっかり暗くなった頃、妖夢は目を覚ました
妖「あ…そっか
私負けたんですね…」
弦『でもまぁ…相抜をあそこまで耐えたのは凄い事だよ
それだけの精神力の持ち主って事なんだからね』
妖「そう…ですか」
妖夢は俯き少し考え込んだ後、何かを決意したような顔で弦を見て
妖「あ、あの！
もし迷惑で無かったら私を弟子にしてくれませんか!?」
弦『は…？』
妖「貴方の剣技に私に無い何かを見出したんです！
お願いします！」
妖夢は布団から飛び出ると弦に向かって土下座して頼み込んだ
弦『ちょ…
頭上げて！』

妖「いえ！
弟子にして頂けるまではこのままで！」
弦『分かった！弟子にする！
するから頭を上げて！』
妖「あ…ありがとうございます！」
こうして弦に半人半霊の剣士が弟子入りしたのだった…

設定１

安心院（あじむ）　弦（げん）

年齢……１８

神様のミスで死んだ被害者

神様から輪廻の枝を貰う

東方の知識は多少有り

見た目は１話で紹介した通り

（輪廻返りの際見た目がかわる）

神様

弦を死なせたはた迷惑な老人

輪廻（りんね）の枝（えだ）

過去の名だたる人物の才能を使えるチートアイテム

輪廻還（りんねがえ）り

枝を使った状態

輪廻還り中は宿した人物によって見た目が変わる

才能
宿した人物によって異なる能力のようなもの、ぶっちゃけチートに近い

※輪廻返りした人物とその才能
１＊宮本武蔵玄信（みやもとむさしはるのぶ）
江戸時代後期の剣術家・兵法家・芸術家
二天一流の開祖
巌流島での佐々木小次郎との決闘で有名
才能…［歪二天礼法（いびつにてんれいほう）］
二振りの刀を呼び出し剣技を扱えるようになる
白刀『腹削ぎ』…並みの刀より軽量で取り回し重視
黒刀『首刈り』…重く硬質な刀身で破壊力重視
２＊ライト兄弟
動力飛行機の発明者で世界初の飛行機パイロット
１９０３年に世界で初めて有人飛行を成功させる
本業は自転車屋で営業の合間で飛行機を開発した
才能…［空の人］

両腕が翼に変わり空を飛ぶ事が可能となる
３＊シュレーディンガー
オーストリア出身の物理学者
量子力学の基礎を築いた人物
「シュレーディンガーの猫」という思考実験が有名
才能…［猫は選択者］
数多に存在する確率世界の中から好きな物を選び取る事が可能になる
※魔理沙と戦った時には【魔理沙の弾幕が当たらない】と【投げた小石に当たった魔理沙が気絶する】の２つの可能性を選び起こした
４＊ナイチンゲール
イギリスの看護師であり統計学者
クリミア戦争中における多くの不良兵への献身や統計を元にした本を書いた
才能…［癒の天使］
相手が死んでさえいなければそれが致命傷であろうと完治させる事が可能になる
５＊ヴラド＝ツェッペシュ
１９世紀ルーマニアにいた貴族
自身の統治に不満を唱える者を次々と串刺しにしていった事から〈串刺し公〉の異名

を得た
ドラキュラのモデルと言われている
才能…［串刺し公］
自身の視界ないに串を作り出し地面や壁から飛び出させる事が可能になる
６＊アルバート＝デサルボ
１９世紀アメリカの殺人鬼
必ず素手で相手の首を締めた事から〈絞殺魔〉の異名を得た
宅配業者になりすまし相手の家に押しかけた為当時の宅配業者は信用されず大赤字を記録した
才能…［絞殺魔（ストラングラー）］
両腕の筋力が膨張し常人離れした腕力を得る事が可能になり、それを支える為体格も大きくなる
７＊柳生十兵衛
江戸時代の剣士
柳生新陰流の開祖でもある
知る人ぞ知る名剣士
才能…［一寸の極み］

視覚を限界まで使用する才能
俗に言う〈スローモーションの世界〉を意図的に引き起こす事が可能となる

間話　インタビュー

幻想郷の何処か、とある1室に5人の少女が集まっていた
文「皆さん！
今日はお集まり頂きありがとうございます！」
魔「いや、訳のわからないうちに集められたんだが…」
ル「一体何の集まりなのだー？」
文「はい！
弦さんと戦った皆さんに色々と取材をしようと言う…
まぁ、つまりはネタが思いつかない作者の苦肉の策です！」
妖「文さん、メタいですよ…？」
文「あ、その点は大丈夫です！
このように許可も取ってあるんで！」
そう言って文が見せた紙には
〔今回は合間埋めの回なんでメタい話しても大丈夫だよ！
ｂｙ作者〕

と書かれていた
咲「作者のいい加減さが分かる文面ね…」
妖「まぁ…そういう事なら」
文「と言う訳で聞いていきます！」

Q．弦の第一印象は？
ル「う～ん…
なんか他の人間より美味しそうだと思ったのだー」
魔「人食い妖怪らしいな…
私は特に無いな、強いて言うなら胡散臭かったぜ！」
妖「私は…優しい方でしょうか
荷物運びを手伝ってもらったのが師匠と初めて会った時ですし」
咲「そうね…
お嬢様からそれなりの強者だと伺っていたけど信じられない…かしら」
文「皆さん様々ですねー！
では次に参りましょう！」

Q．戦ってどうだった？
魔「そりゃもうボロ負けだぜ…
マスパも当たらないし…それでいてこっちは小石1つぶつけられただけで気絶、悔しいったらありゃしないぜ…」
咲「そうよね…
スペカ防ぐのはもはやイカサマもいいところよ…」
ル「スペカ防がれたと思ったらあのー…相抜？とか言うのがきたのだー…
刀も死も怖く無いはずなのに全く動けなかった…」
妖「あー、相抜はキツいですよね…
私も数十分は耐えられましたけどその後数時間寝込んでしまいました…」
ル「耐えただけでも凄いよ…
私なんか1分も耐えてないのだー…」
文「いやー、やはり弦さんは強いですね！
どんどんいきますよー！」

Q．見てみたい対戦カードは弦ｖｓ誰？
咲「対戦カード…

そうね、お嬢様とかパチュリー様との対戦は見てみたいかもしれないわね」
魔「私はパチュリーとアリス！
同じ魔法使いとして仇をとってもらいたいぜ！」
妖「師匠なら誰と戦っても勝つと思うけど…
霊夢との戦いは見てみたいかも…」
ル「特には無いのだー！」
文「様々なカードが希望出されましたねー！
あ、この質問は読者の皆様にも聞きたいので見たいカードはコメントよろしくお願いしますね！
それでは今回はそろそろ終わりです！
今後とも【幻想郷のリィンカーネーション】をよろしくお願いします！」
ル・魔・咲・妖「「「よろしくお願いします！」」」」

8話　占い師

魔「霊夢ー！
遊びに来たんだぜー！」
ある日、霊夢が神社で1人茶を飲んでいると魔理沙が大声を出しながら入ってきた
霊「あら魔理沙、いらっしゃい」
魔「相変わらず暇そうにしてるな
まぁ参拝客来ないから仕方がないか！」
魔理沙は軽口を叩きながら霊夢の正面に座りちゃぶ台に乗っていた煎餅を齧りだした
霊「あら、喧嘩売ってるのなら高く買うわよ？」
魔「別にそういう訳じゃないんだぜ
それよりも霊夢、真夜中の占い師って知ってるか？」
魔理沙は煎餅片手に身を乗り出し面白がった目で目の前の霊夢に聞いた
霊「真夜中の…占い師？
なによそれ？」

魔「最近人里で噂になっているんだぜ
何でも夜中に人里を歩いていると全身黒い服に黒い帽子、そして顔を鳥みたいな仮面で隠した奴が現れて予言をしていくらしい」
霊「予言…ねぇ
確かに変な話だけどそれだけでしょ？」
魔「それがそうでもないのぜ、何でもそいつの予言は…
今まで1度たりとも外れた事が無いらしい」
霊「1度たりとも外れた事が無い…？
それが本当なら大したものね」
魔「だから霊夢！
今夜そいつを探しに行こうぜ！」
霊「探すって…
夜中に人里を歩いていると現れるって事しか分からないんでしょ？
そんなの探しようが無いじゃない」
魔「だから今夜人里を見周ろうぜ！」
霊「う～ん…
本当は寝たいんだけど…

まぁそいつが何か異変を起こさないとも限らないし…行きましょうか」
魔「決まりだな！
今夜が楽しみだぜ！」
その後２人は日が暮れるまで和気藹々（わきあいあい）と世間話で盛り上がるのだった
日が暮れ暗くなった人里で、２人は件の占い師を探し周りあちこちを見て回っていた
魔「う～ん…
見つからないのぜ…」
霊「やっぱりガセネタだったんじゃないの…？」
魔「そんなはずは…
霊夢、あそこだ！」
魔理沙が指差す先には橋の上で佇み開いた本に目を落とす件の占い師がいた
霊「都合よくこっちに背を向けているわね…」
魔「今のうちに近づくんだぜ！」
２人は足音をたてないように慎重に近づいていく
そしてあと数メートルという距離まで近づいた時、急に占い師が口を開いた
占『巫女と魔法使いが私を探し、この橋で出会う…
今宵も我が予言書に狂い無し…』

魔「私が来るのを分かってこの橋で待ってたって訳か…？」
霊「それなら私達が来た理由も分かっているわよね？」
霊夢がお祓い棒、魔理沙が八卦路を構えると占い師はゆっくりと振り向いた
占『残念だが予言書には今宵出会う事しか書かれていないのでね…
来た理由までは分からない』
霊「なら教えてあげる、あんたがその予言の力を使って異変を起こさないかその確認に来たのよ」
占『それはご苦労な事だね…
だが私の予言は起こる事を言い当てるのみ…
それでは異変など起こせるはずも無いだろう…？』
霊「…それもそうね」
占『そうさ…私は異変なんて起こせない』
魔「待て、私〝は〟ってことは他に異変を起こす奴がいるのか？」
占『さてどうだろうね…？
少なくとも我が予言書に異変の２文字は書かれていないよ』
霊「どうだか…
案外仲間がいてそいつが異変を起こしたりして…？」

占『ふむ、流石は博霊の巫女殿…
私に仲間がいると言い当てるとはね…
予言者の才能があるのではないかな…？』
霊「お褒めいただき光栄ね…
その仲間について聞かせてもらうわよ」
魔「霊夢の予想通りその仲間に異変起こされたら面倒なんでな」
２人がいつでも攻撃出来るよう構えると占い師は本を開いた
占『君達に予言を授けよう…
１つ、私はこの場より無傷で開放される
２つ、この幻想の地に過去の災厄と栄光が訪れるだろう』
霊「残念だけどその予言は外れるわね！
霊符〈夢想封印〉！」
霊夢が放った弾幕は見事に占い師を捉え命中した
霊「これで無傷じゃ無いでしょ！」
占『いいや？予言通り無傷だよ…
私の予言は外れないからね…』
魔「確かに当たっていたはず…」

占『それではお2人、またいずれ何処かで…』
そう言い去っていく占い師の背を2人はただ見ていたのだった…

輪廻異変

9話　災厄と栄光

霊夢と魔理沙が占い師に出会い逃げられてから数日…
幻想郷のあちこちで不可解な物が見つかるようになっていた…
ー例えば地下では…
旧地獄後にて1人の妖怪が頭を抱えていて
「なんだこの岩…？
まるで…握り潰されたみたいな…」
バラバラに砕け散った手形付きの岩が点々と見つかっており…
ー例えば妖怪の山では…
山を見回る2人の天狗が話し込んでいる
「なぁ…
なんか最近臭わないか…？」
「だよなぁ、何かが腐る匂いっていうか…」
日に日に増していく発生源不明の腐敗臭がしており…

ー例えば迷いの竹林では…
妹「暇だなぁ…」
竹林の案内人、藤原妹紅が暇を持て余していると…
妹「…なんだこれ!?
竹林のあちこちに…張り巡らされた縄と切り裂かれたような跡が無数に…!」
突如として現れた縄と痕跡が多数見られ…
ー例えば紅魔館では…
美「Ｚｚｚ…
むにゃむにゃ…」
門の外で赤髪の中国娘、紅美鈴がまた居眠りをしていると…
スカァン!
と美鈴の顔横数ミリの位置に何かが刺さる
美「…!!
これは…氷柱?
またチルノさん達が悪戯に来たんでしょうか…」
何時も悪戯に来る氷妖精を探すも見当たらず…
?「これで宣戦…布告って事で」

その様子を遠く離れた森の木の上から見続ける真っ白なコートを着た人影があった…

そんな事は露知らず、霊夢と魔理沙は博麗神社でくつろいでいた…

霊「あ～もうっ！

何なのよあの鳥野郎！」

訳では無かった

魔「鳥野郎…

まぁそれには同感だぜ、今思い出しても腹が立つ！」

数日経ったこの日でも件(くだん)の占い師に対する怒りは消えていないようだった…

霊「くっそ～…

まんまとアイツの予言通り無傷で帰しちゃったじゃ無い…

なんだかコケにされた気分だわ…」

魔「まったく同感だぜ…

あ、予言と言えばアイツもう一つ予言出してなかったか？」

霊「あぁ…

【この幻想の地に過去の災厄と栄光達が訪れるだろう】とか言うアレ？
一体何の事なのかしらね…？」
魔「幻想の地ってのは幻想郷の事だとしても…
災厄と栄光ってのが何なのかがなぁ…」
霊夢と魔理沙が今で予言について考えているとカキンッという鍵のかかるかのような音が2度境内に鳴り響いた
魔「…霊夢、今の音は？」
霊「境内に鍵が付いている物は無い…
誰かが来たようね？」
魔「やっぱりな…
異変の匂いがするぜ！」
霊夢と魔理沙がそれぞれ武器を構え表に出ると、そこには3人の見慣れない者たちがいた
その容姿は真っ赤な赤髪・全身を覆う宇宙服・背に巨大な輪を背負った仮面といかにも胡散臭そうで…
？「初めまして博麗の巫女さま、私はニュートン…
組織【リインカーネーション】の一員です」

３人を睨みつける霊夢と魔理沙を赤髪が口を開くとそれを皮切りに他の２人も話し出す

？「私はガガーリン、同じく【リィンカーネーション】の一員だよ」

？「俺様はテスラ、【リィンカーネーション】の一員だぁ！」

三者三様の紹介を聞き、霊夢は率直に疑問をぶつける

霊「あんた達の事は分かったわ…

それで…？その組織が一体何の用かしら…？」

ニ「いえ、大した事じゃありませんよ…」

睨みつける霊夢と対象的にニコニコと笑うニュートンは次の瞬間その笑みを崩し宣言する

ニ「ただ少しこの幻想郷を襲うに辺り邪魔な巫女を倒しに来た…

それだけですよ…！」

そしてその言葉を皮切りにその場の５人は一斉に臨戦態勢をとるのだった…

これが後に【輪廻異変】と名付けられる異変…

その始まりであった

１０話　神社の戦い

霊「幻想郷を襲うって事は…
異変を起こそうとしてるってことで良いのかしら？」
ニ『その認識で問題ありませんよ…
ま、貴方達が私達に勝てるはずもありませんけどね？』
魔「そんなのやってみないとわからないのぜ！
くらえ！恋符〈マスタースパーク〉！」
ニ『甘い！〈重力の実〉！』
魔理沙が先手を打ち放った光線はニュートンと名乗った男がリンゴのような投げると進路を曲げ境内の石畳に当たる
その向こうではリィンカーネーションとかいう組織だと名乗った３人は涼しい顔でそこに立っていた…
魔「なっ…!?」
ニ『その攻撃がいくら強力な攻撃であろうと所詮光線に過ぎない！
なら強い重力下ではそれは曲がり我々には届かないのも道理というもの！』

テ『まだまだ行くぜぇ？
安全錠解錠！〈世界システム〉！』
今度はテスラと名乗った男が叫ぶと背負っていた輪がバチバチと帯電し辺りに強力な電撃を撒き散らした
その電撃を食らったものは石畳や木に草、そして神社の社や社務所までもが燃える間もなく全て例外無く一瞬で炭となり、ところどころ灰になった
霊「神社が…！
あんたらよくもぉ…！」
霊夢は燃え炭と化した神社を見て目の前に立つ２人を睨みつけた
霊「２人…!?
あの全身を宇宙服で覆った奴は…!?」
魔「上だ！」
魔理沙が叫びながら指し示した先には小型の宇宙船のような物とドッキングしたガガーリンと名乗る男の姿があった
ニ『おや、ガガーリンの奴アレやる気ですね？』
テ『巻き込まれちゃ叶わねぇ、一旦退くぞ！』
ガ『さて、彼らも避難したしやるとしようか…

第1～第3花束開放、投擲準備』
そのガガーリンが腕につけた端末のような物を操作しているのを見たニュートンとテスラが同時に後ろへと飛のく
それを見たガガーリンが更に端末を操作すると宇宙船に付いた球体が3つ外れその場に浮かぶ
霊「何をする気…？」
魔「分からないが…
アイツらが退いたのを見る限り良い事ではなさそうなのぜ…！」
霊「くっ…！
悪いけど邪魔させてもらうわよ！」
ニ『させません！』
霊「うぐっ…！」
ガガーリンを止めようと飛ぼうとした霊夢はニュートンが投げた実に引っ張られあえなく落下してしまう
ガ『この幻想郷で言うセリフでは無いかもだけど…
敢えて言わせてもらおうか…』
そんな霊夢達を見下ろしながら言い終わるや否やガガーリンは前を指差すように指

と腕を前へと伸ばすとゆっくりと口を開いた
ガ『地球は青かった、しかし…
神はいなかった』
ガガーリンが伸ばした指を霊夢達のいる下へと曲げると同時に周りに浮かんだ球体は霊夢達目掛け落下していく
霊「っ…！」
魔「うわっと！」
霊夢と魔理沙は間一髪で避けるもガガーリンの放った球体が着弾した所には広くこそ無いが数十ｍはあろうかと言う深さの大穴が空いていた…
ニ『これがガガーリンの〈神の不在〉ですか…』
テ『この威力でも弱体化してんだろ…？
つくづく、本当に味方で良かったと思うぜ…』
境内の石畳に空いた大穴を見て思い思いに口を開くニュートンとテスラを他所に、間一髪でガガーリンの攻撃を躱した霊夢と魔理沙はもはや灰と炭の固まりと化した本殿の前で息を切らしており…
魔「くそっ…！
弾幕はあの赤髪のリンゴに曲げられあの仮面野郎の電撃で近づけもしない…

その上この大穴を空けるほどの物を降らせてくるんじゃあ勝ち目なんて…」
霊「しっかりしなさい！
必ずどこかに隙があるはず、それを探すのよ！」
諦めそうな魔理沙を霊夢が一喝すると２人は改めて襲撃者達を見据え何か手は無いかと考え始める
テ『おっと！
休んでる暇はねぇぞ!?』
動きを止めた２人を見たテスラはまた背負った輪に蓄電し電撃を放ち始めた
魔「くっ…！」
霊「…？
もしかしてこの電撃…」
テスラが放った電撃を回避するなか何かに気づき霊夢のテスラを見る目が鋭くなる
テ『まだまだぁ！』
霊「やっぱり…！
魔理沙、こっち来なさい！」
再度電撃を放つテスラを見た霊夢は自らの抱いた疑心を確信へと変えると魔理沙を呼び相手に聞こえないよう話し始めた

魔「なんだ霊夢、もしかして隙とやらを見つけたのか!?」
霊「ええまぁ、あの仮面の奴が放つ電撃の隙なら見つけたわ」
魔「マジか！
教えてくれ！」
霊「ええ、まず奴は電撃を放つ前に必ず僅かに動きを止め電気を溜める
そして肝心の電撃は高威力で広範囲に及んではいるけど…その狙いは大雑把で雑だから落ち着けば普段撃ち合ってる弾幕より回避は簡単だと思う」
魔「なるほど…
ならアイツの電撃は気をつけていればさほど怖く無いな…」
霊「ええ、だから残り2人さえなんとか出来れば…」
言いながら霊夢は目の前に立つニュートンと未だ浮かんでいるガガーリンを交互に見て、魔理沙も霊夢の視線を追うように2人の姿を見た
霊「あのニュートンとか言う赤髪さえなんとか出来れば弾幕も使えるし空も飛べるんだけど…
そう簡単にいかないのよね…」
魔「それなら霊夢、私に考えがあるのぜ…」
そう言い魔理沙は霊夢へと自らの立てた作戦をこっそりと耳打ちし伝える

すると霊夢のは疑うような顔で魔理沙を見た
霊「それ上手くいくわけ？」
魔「確証は無い、だけど…」
霊「他に作戦も無い以上やるしか無いか…
良いわ、その作戦乗った！」
魔「とちんじゃあ無いぞ？」
霊「誰に言ってんの？
アンタこそしっかりやりなさい」
魔「おうっ！」
一言返しながら箒に乗った魔理沙はその手に八卦炉を構えニュートンへと突撃していく
魔「いくぜ！」
ニ『こりませんね！』
魔「いくぜ！
〈マスタースパーク〉！」
ニ『〈重力の実〉！』
魔理沙が放った光線はまたも曲げられ石畳へと当たる

しかしそれを見た魔理沙は不敵にニヤリと笑った
魔「かかったな！」
ニ『何をっ…!?』
魔理沙の放った光線が直撃した石畳は割れ、先にガガーリンが開けた大穴の中へとニュートンごと落下していった
霊「よくやったわ魔理沙！
そっちのは任せたわよ！」
魔「おうよっ！」
ニュートンが穴へと落ちると同時に2人は動き出し、霊夢は宙へ浮かぶガガーリン魔理沙は急ぎ充電を開始したテスラの元へと真っ直ぐに飛んでいく
そして霊夢は札を構え、魔理沙は手に持った八卦炉をテスラへ向けると同時に口を開いた
霊「霊符…〈夢想封印〉！」
魔「恋符…〈マスタースパーク〉！」
ガ・テ『ぐぉぁぁぁぁっ！』
至近距離で弾幕を食らったガガーリンは地へと落ち、0距離で光線を食らったテスラはその身を地へと伏した

そして２人が倒されると同時に穴へと落ちたニュートンが実が生み出す重力を使い穴から飛び出してくる
霊「残念でした！」
魔「作戦成功だぜ！」
しかしそれを待ち伏せていたかの如く霊夢と魔理沙はニュートンの背後へ回ると全力の攻撃を叩き込みニュートンを倒した
ニ『見事…ですね』
霊「ふぅ…なんとか勝てたわね」
魔「何だったんだコイツら…」
ニュートンが沈黙した事を確認した２人はその場に座り込み息をつき始めた
するとその場にカキンッという音が静かに響き渡るとその場にいなかった筈のスーツに見を包んだ男が立っていた
？『これはまた酷くヤラれたもんだ…』
霊「誰っ!?」
？『慌てなさんな博霊の巫女さんよ
私はアインシュタイン、【リィンカーネーション】の一員…
しかし今は争う気は無い』

魔「どうだかな…」
ア『そもそも今回の目的は宣戦布告、既に目的は達した』
アインシュタインと名乗った男は倒れていた3人を引き寄せながら淡々と言う
霊「宣戦布告ですって…!?」
ア『そのとおり…
3日後、我々の仲間がまたこの幻想郷へ訪れる
何処とは言わないが』
霊「待ちなさいっ！」
霊夢が咄嗟に飛びかかろうとするもアインシュタインが舌を出すと倒れていた3人ごとカキンッという音と共に姿が消えた
魔「消えたっ!?」
霊「くそっ…
アイツらの招待を探る良い機会だったってのに…！」
驚く魔理沙と悔しがる霊夢の元へと飛び近寄ってくる人影があった
半人半霊の剣士、魂魄妖夢である
妖「霊夢魔理沙！無事っ!?」
霊「妖夢！

あんたどうしてここにっ!?」
妖「ほら、最近噂になってた占い師…
このあいだその人から『数日後、巫女と魔女が襲撃され神社が倒壊する』って予言されてて…
気になってた所に神社からの煙が見えて…急いで飛んで来たんだよ」
霊「占い師が…?」
妖「うん…
っと、それよりも早く行かないと！
ついて来て２人共！」
魔「な…なんだ、どうしたっ!?」
妖「紫様に２人を白玉楼に連れて来るよう言われたの！」
霊「紫が?」
魔「あのスキマがなんで?」
妖「良いから早く！」
疑問を並べる２人は妖夢に手を引かれ白玉楼へと飛び去っていくのだった

11話　会議

神社での戦いから数分、霊夢と魔理沙は妖夢に連れられ白玉楼へと来ていた
妖「紫様、お連れしました！」
紫「お疲れ様妖夢、これで揃ったかしら？」
霊夢と魔理沙を連れ妖夢が入った部屋には妖怪の賢者、八雲紫を中心に他数名が左右に分かれるような形で座っていた
霊「レミリアに早苗…それと犬？」
椛「犬じゃないですよ!?」
魔「それに妹紅に…勇儀まで
一体何の集まりなんだぜ？」
不思議そうに尋ねる魔理沙の問いに紫はゆっくり、はっきりとした声で告げる
紫「今回の異変…その関係者と思わしき、もといその代表の人々よ」
霊「異変…？」
紫「ええ、これを見てちょうだい」
そう言いながら差し出された紙へ霊夢と魔理沙は目を通し始めた

霊「えっと…？

《幻想の地に住まう者達へ

今ここに我らはこの幻想の地へと宣戦を布告する事をここに示す

今日の神社への襲撃を起点とし数日おきに計５ヶ所へ襲撃を行う

我らの襲撃先へは目印を置かせて頂いた

我らが才能をその身を以て体感せよ

我らは組織【リィンカーネーション】

輪廻の輪より蘇りし者なり》

…なにこれ？

っていうか【リィンカーネーション】って…」

魔「あの…神社に来た奴ら、だよな？」

紫「今朝その張り紙が幻想郷の各地で見つかったの

それで急ぎ幻想郷中を調べたら紅魔館・妖怪の山・迷いの竹林・地底の４ヶ所で異常が起きているのを見つけて…」

勇「それでその情報交換と会議の為に私達が集められたって訳さ」

紫と酒を煽る勇儀の言葉に納得した霊夢はふと早苗の方を向き尋ねる

霊「事情は分かったけど…早苗はなんでここに？

見たところ山の代表はそこの犬なんでしょ？」
尋ねられた早苗の代わりに答えたのは白犬…もとい白狼天狗、犬走椛であった
椛「私がお連れしました、山で見つかった物に関して心当たりがあるとかで…
あと私は犬じゃ無いですよ？」
霊「見つかった物…？」
霊夢が詳細を尋ねようとした矢先、紫がゆっくり言い聞かすように口を開いた
紫「それを含めの…この会議よ
立ち話はそれぐらいにして始めましょうか？」
紫のその言葉にはっとなった霊夢と魔理沙は近くにあった空いていた座布団へと腰を下ろした
それを見た紫は集まった面々を一通り見ると満を持したように話し出す
紫「それでは…
今回の異変、その情報交換とそれに対する話し合いを始めましょう」
紫の会議開始の宣言に一同は無意識にも佇まいを正した
紫「まずそこの風祝の子の心当たりは…
最初に聞くよりも各地の報告を聞いて合っているかを確かめてもらってからが良いかしらね？」

早「は、はい！
おそらくはその方が良いかなと！
自分で言うのもなんですが…割と突拍子の無い考えなので」
紫「分かったわ、それじゃあ…
少し良いかしら、レミリア・スカーレットさん？」
レ「えぇ、何かしら？」
紫「紅魔館で起きた異常の詳細と…
もし、この【リィンカーネーション】とか言うのが欧米…外の世界の言葉なら和訳を頼めるかしら？」
レ「分かったわ」
紫から話を振られたレミリアはコホンッと咳払いを一つすると話し始めた
レ「まず先に和訳から教えるわね…
【リィンカーネーション】は確かに外の言葉よ
意味は…そうね、『輪廻転生』が近いんじゃないかしら？」
紫「輪廻転生…ね、分かったわ
それで異常の方は何があったの？」
レ「数日前にうちの門番である美鈴が…その…

居眠りしていた時に顔の横に巨大な氷柱が突き刺さったらしいのよ」
霊「それって…チルノの悪戯とかじゃないの？」
レ「えぇ、私もそう思ったわ
でも美鈴曰く…
『チルノさんなら悪戯する時はやる前に名乗りますし…
不意打ちをするにしても姿を見せないなんて事はまず無い筈です』
らしいのよ、それで咲夜に頼んで妖精達に聞き込みをさせたの」
椛「そうしたら妖精達がやっていないと？」
レ「そのとおり、しかも念の為パチェにその氷柱を調べてもらったの
そしたら魔法でも能力でも自然でも無い何かによって作られた物だったわ
私…紅魔館からはこんなところね」
紫「なるほどね…
それでは次に…藤原妹紅、竹林の異常について良いかしら？」
妹「私か、了解した」
指名された妹紅は崩していた足を直し背を伸ばす
そして周りを一通り見回すと話し始めた
妹「こっちも数日前の事だ

いつも通り迷い込んだ人間がいないか竹林の見回りをしていた
そうしたら前日まで無かった物が見つかったんだよ」
紫「具体的には？」
妹「まず竹林のあちこちの高所に縄が張り巡らされていた
そして切り裂かれたみたいな跡のついた竹や岩だった物、それと…
これは後になって気づいたんだが地面のいたる所に蹄（ひづめ）の跡があった」
魔「縄と跡は分かるが…
蹄の跡なんて珍しくもないだろ？」
妹「あぁ、蹄の跡だけならな…」
魔理沙の問いにゆっくりと頷き答えた妹紅は少し間を開け話す
妹「確かに蹄の跡単体なら異常でもなんでも無い…
しかしソレが見つかったのは入れば出られぬ迷いの竹林な上に…
私はここ数ヶ月間毎日竹林を見回っていたが馬や牛を、蹄を持つ動物を見かけて無いんだ」
霊「確かにそれなら蹄の跡なんて付く筈も無いし…
万一付いたにしてもそれを付けた犯人…犯獣？を見てない筈も無い」
紫「なのにある筈も無い跡があった…と」

妹「あぁ、そういう事だ
これで竹林の異常は全てだな」
紫「縄・切り裂かれた跡・蹄の跡…ね
次に勇儀、地底では何があったのかしら？」
勇「私らの所かい？
んー…異常って言うほどかわからないけど話そうかね」
紫に名指しされた勇儀は傾けていた盃を置き、少し赤くなった顔で口を開く
勇「この間の事なんだけど…
普段人の寄り付かない岩だらけの平地があるんだけどさ
そこにある一層大きな岩に手形がついていてね、しかも握りつぶされたみたいに砕けかけていたんだよ」
霊「一応聞くけど…あんた達鬼がやったんじゃ無いわよね？」
勇「それは無いね、私もこの話を聞いてすぐにそれを疑ったがね…
鬼連中は皆やってないって言うのさ」
紫「嘘を嫌う鬼が言うなら間違いなさそうね」
勇「あー…あともう一つ
最近その平地近くで大きな…私より大きいぐらいの人影を見たって話が増えてるね」

魔「勇儀のより大きいって…」
勇「地底からは…そんな所かね」
紫「それじゃあ…次
ここらで霊夢に魔理沙、実際に襲撃にあった貴女達の話を聞かせてもらえるかしら？」
霊「分かったわ」
魔「と言っても話せる事は少ないがな」
指名を受けた２人は座り直すと先の出来事を思い返しながら話し始める
霊「まず私達がくつろいでいると境内からカキンッて鍵みたいな音がしたの」
魔「それで怪しいと思って様子を見に行ったんだぜ、そしたら境内に見た事無い奴が３人いたんだ」
霊「でまぁ…詳細は省くけどそれぞれが強い攻撃をしてきてね…
魔理沙と作戦たててなんとかそいつらに勝ったのよ」
魔「それで安心してたらまたカキンッて音がして顔を上げたんだ」
霊「そしたらそこにさっきまでいなかった奴がいて倒した３人を連れて一瞬で姿を消したって訳」
妹「一瞬で姿を？」

勇「そいつ人間か？
なんかの妖怪じゃ？」
霊夢と魔理沙の話に一同がガヤガヤと話す中、そっと早苗が腕を上げ尋ね始めた
早「あのー…少し良いですか？」
霊「良いけど…なにかしら？」
早「その４人の特徴、もしくは名前って分かりますか？」
霊「えぇ、確か…赤髪・宇宙服・仮面、それとスーツだったかしら？」
魔「それで名前が…
戦った３人がニュートン・ガガーリン・テスラ…
それで迎えに来た奴がアインシュタインだったはずだぜ」
早「そうですか…やっぱり」
霊夢と魔理沙の話を聞いた早苗は確信を持ったような顔になる
それを見て紫は口を開いた
紫「それじゃあ最後、犬走椛並びに東風谷早苗…
妖怪の山の異常と心当たりについて教えてちょうだい？」
早「了解です！」
椛「私が話せる事で良いならば…」

トリを任された2人は背筋を伸ばし呼吸を深く一つするとゆっくりと話し始めた
椛「まず初めに…
数日前から山の中腹で…腐敗臭のような物が発生し始めました」
霊「腐敗臭？」
椛「えぇ、とは言っても腐敗臭自体はそう珍しくは無いんです
住んでいる野良妖怪や獣の死体が腐れば臭うので…
なので最初は皆気にしていませんでした」
紫「なら何故それを異常と？」
椛「普段ならば腐敗臭は1日あれば収まりますし近寄らなければ分からない程には強くありません
しかし…今回は収まらず日に日に匂いは強くなっていきました」
早「普段匂いが届かないうちの神社まで匂いが来てましたからね…」
レ「数日続く腐敗臭…ね
私ならそんな所ごめんだわ」
椛「ははは…
それで、ここからが本題です」
魔「今までのは前置きか」

椛「ええ、そういう事です
この腐敗臭騒ぎを受け原因を探るため調査隊かが組まれました
しかし近づいた者達は皆羽や皮膚が腐敗し戻ってきたのです
そこで千里眼を持つ私が駆り出され腐敗臭の中心と思わしき地点を覗き見ました」
勇「へぇ…
それでどうなったんだい？」
椛「はい、中心地らしき場所には2名の…
人間と思われる者がいました」
紫「人間と…思われる？
何故断言出来ないのかしら？」
椛「その…片方は身体の半分近くが腐敗したようになっており、もう片方は周りが腐り続ける中平然とした様子でいたからです」
紫「なるほど…
その2人の容姿や特徴は？」
椛「まず…先に挙げました身体が腐敗した者は高身長の大男、スーツらしき服を着用しておりました
そしてもう1名は…軍服らしき物を着用し、大きな椅子に腰をかけ足を組んでおりま

した
そして…その…」
霊「どうしたの？
なにか気になる事？」
椛「偶然だとは思うのですがその椅子に腰かけた者が…
急に気づけも視認も出来る筈の無い距離にいた私の方を向き挑発するかのように明らかに笑みを浮かべたのです」
魔「犬の千里眼に気づいたってのか？」
椛「だから犬じゃないです！
…とそれはさておき、それを見て私は千里眼を切りました
そして、件の腐敗臭が広まると同時期に山のあちこちで野良妖怪や獣の体に…コレが取り付けられているのが目撃され始めたのです」
そう言い椛が取り出したのはシールのような物だった
その裏面、体に触れたであろう場所には鍵十字を反転させ斜めへと傾けたマークが描かれていた
霊「このマークは…？」
早「それは逆鍵十字（ハーケンクロイツ）と呼ばれる物です

実は私の心当たりと言うのもこれに関係していて…」
紫「なら…話してくれるかしら？」
霊夢の問いに答えた早苗へと一同の視線が集まると紫はゆっくりと話すように促した
早「えっと…まずこの逆鍵十字（ハーケンクロイツ）は外の世界の物なんです」
霊「外の？」
早「はい、そしてこのマークはヒトラーという…
外の世界の有名人のシンボルでもあります」
紫「その人と関係なしにマークが使われている可能性は？」
紫の問いに早苗は静かに首を振り否定する
早「無い事も無いですが…
とても低いかなと思います」
霊「なんで？」
早「ヒトラーもなんですが…
霊夢さん達が襲撃されたという4名のうちニュートン・ガガーリン・アインシュタインの3名は外の世界の有名人なんです、それこそ知らない人などいないくらいには…」
勇「なら…外の世界の奴らが幻想郷を襲いにきたってとこか？」

早「はい…
でもそうだとするとどうにも不可解な事があるんです」
レ「不可解な事？」
早「今私が有名人だと言った４名は…
何十何百年前の人で…既に死んでいる筈なんです」
魔「つまりなんだ？
今幻想郷を襲いにきてるのは死人だとでも？」
早「そう…なるかと」
紫「なるほど…確かにそれは不可解ね」
早苗の話を聞き終えた一同は頭を抱え考え始める
その後数時間話し合い襲撃があった時には伝令を送る事とし解散したのだった

12話　紅魔の戦い

博霊神社の襲撃から3日、紅魔館では並ならぬ雰囲気が流れていた
言わずもがな件の襲撃者、リインカーネーションのせいである
レ「襲撃者共の話を信じるなら前の襲撃から3日経った今日が次の襲撃日…
どこに来るかわからない以上、一層気を引き締めないとね…」
咲「しかしお嬢様…
本当に霊夢達が苦戦するような相手が？
にわかには信じきれないのですが…」
レ「私だって信じきれないわよ、だけど普段は傍観しているスキマがわざわざ出てくるって事はそれだけの事態って事だもの…
信じざるを得ないわね」
レミリアの私室で2人がそんな事を話していると1人のメイドが飛び込んできた
いわく正門前に2人の不審者が突如出現、美鈴を倒しそのまま館内へと侵入したとの報告だった
レ「きたわね!?」

報告を聞くやいなやレミリアと咲夜は部屋から飛び出し侵入者の元へと急ぐ
そしてたどり着いた2人が見たのは…
レ「貴方達ね？
我が紅魔館へ襲撃にきた愚か者達は？」
？『リインカーネーションの襲撃者かという意味なら…
確かに私達がその愚か者とやらだね』
？『流石にリインカーネーションの名と襲撃については情報共有されてるらしいですね』
そこには全身を西洋式の鎧兜で覆った男と背に巨大な輪を背負った細身の男がいた
レ「あら、2人だけなのかしら？」
？『さて、どうでしょうね？
それより礼儀知らずと思われるも心外です、名乗らせてもらいましょう』
あたりに他の人影が無いと確認済みのレミリアは明確には答えない相手の言葉を嘘（ブラフ）だと断定しいつでも仕掛けられるよう構えながら目の前の2人の名乗りに耳を傾ける
？『まず私の名はメビウス
リインカーネーションの一員です』
？『そして私はカエサル、またの名を古王シーザー

こいつと同じリィンカーネーションの一員だ』
レ「あら、ご丁寧にどうも
名乗られて名乗り返さないのは淑女(レディ)として失礼かしらね？
紅魔館当主、レミリア・スカーレットよ」
咲「私は紅魔館メイド長、十六夜咲夜と申します」
侵入者共の名乗りを聞いたレミリアと咲夜は相手から目を離す事無く名乗り返した
レ「悪いけど…先手打たせてもらうわよ！
神槍〈スピア・ザ・グングニル〉ッ!?」
レミリアが作り出した紅い槍を放とうとしたその時、突如として窓を割りレミリアに向かい何かが飛来した
レミリアはそれを間一髪避けるも回避に気を取られ槍を保てず消してしまった
カ『ほう、今のを避けるか』
メ『伊達に吸血鬼やっていませんね？』
レ「くっ…今のは何!?」
レミリアは先まで自分が立っていた場所に目をやりながら侵入者2人に問いただす
そこには紅魔館の外壁に刺さったのと同じ太く大きな氷柱が刺さっていた
メ『3人目の襲撃者です』

カ『名をシモ・ヘイヘ、凄腕の狙撃手だ』
レ「シモ・ヘイヘ…ね
その狙撃手で最後かしら？
まさかまだ隠れてるなんて事は無いわよね？」
カ『あぁ、ヘイヘで最後だ安心すると良い
そもそも我らは襲撃に対し必ず三人一組で赴く事になっているのでな』
メ『ま、私達の話を信じるかは貴女次第ですがね』
レ「なら信じる事にしようかしら、あくまでもとりあえずの所は…だけど」
レミリアはそう言うと隣に立つ咲夜へ小声で指示を出し始めた
レ「咲夜、今すぐに伝令を飛ばしなさい」
咲「…かしこまりました、内容は？」
レ「紅魔館に襲撃があった事、そしてその襲撃者達の特徴と名を伝えなさい
そしてそのついでにヘイヘとか言うスナイパーを片付ける事、分かったわね？」
咲「かしこまりました…
お嬢様、どうかご武運を…」
互いに2言だけ言葉を交わすと咲夜はその場から離れていった
メ『おや、行かせてしまっても良いのですか？』

カ『我ら2人をお前さん1人で相手どれるとでもお思いかな？』
レ「ふん、これでも吸血鬼の端くれよ？
霊夢達を苦戦させたとは言え人間にまったく手も足も出せない事は無いわ！」
言いながらレミリアはその手に真紅の槍を作り出すとメビウスとカエサル両名に向かい全力で投擲した
メ『〈メビウスの輪〉！』
しかしその槍はメビウスが出した輪に触れた途端に止まりそのまま霧散してしまった
レ「槍がっ…！
なるほど、伊達に霊夢達と渡り合った奴らの仲間じゃ無い訳ね」
カ『お褒めいただき光栄だね
今度はこちらから行かせてもらおう、〈英雄の証〉！』
そう言うとカエサルは懐から1つのサイコロを取り出す
そしてそれを床に落とすとそこから大砲を扇状に並べたような物がせり上がってくる
カ『オルガン砲！』
カエサルがいつの間にか手に持っていた松明で火をつけると直径１０ｃｍはあろう

かという砲弾が撃ち出され、辺りの壁や扉を破壊した
しかしレミリアはそれを間一髪で避け２人から距離を取った
カ『ま、避けられるだろうな』
メ『仮にも吸血鬼、オルガン砲の弾は避けますか』
レ「お褒めいただき光栄ね…」
（不味いわね…
あの武器召喚があるんじゃ近づけないわ
幸い召喚自体は早くても吸血鬼である私に効く武器が無いであろう事が救いかしら…
咲夜が戻るまでなんとか凌がないと…）
レミリアがそんな事を考えているとカエサルがまた武器を呼び出した
今度はどうやら剣のようで…
カ『ロングソード！』
カエサルはその手にロングソードを構えるとレミリアに向かい一直線に突っ込んでいく
考えていた事もあり反応が遅れたレミリアはしまったと思いながらも受け流そうと構え…

カ『…!?』
たがその刃がレミリアに届くことはなく、レミリアとカエサルの間に張られた結界らしき物に阻まれていた
？「間一髪ってところかしら？
異常があったと聞いていたけど…侵入者とはね」
そう言いながら廊下の奥から紅魔館の住人、パチュリー・ノーレッジが姿を表した
レ「パチェ…ありがとう、助かったわ」
パ「どうってこと無いわよ、それより目の前の敵に集中なさいな」
レ「えぇ、そうね…」
親友2人は短く言葉を交わすと目の前の2人へ視線を向けた
メ『これで実質2対2…ですね』
カ『しかしなんら問題は無いだろう？
どうせ我らの目的にに変わりは無いのだからな』
そう言いながらカエサルは持っていたロングソードを捨てるとまた新たに武器を召喚した
そこに現れたのは刀身だけでレミリアの背丈と同じ程はあろうかという大剣だった
カ『斬首する者（エクスキューショナー）！』

カエサルは取り出した大剣を振りかぶりレミリアとパチュリーに向かい突っ込むとそのまま思い切り振り下ろした
レミリアとパチュリーはなんとかそれを避けるもカエサルの大剣に廊下は割られ奥まで割れ目が伸びていた
カ『中々に素早い…！』
レ「あいにくと伊達に吸血鬼やってないのよねっ！」
パ「私も運動不足の体力無しだけど…魔法を使えばこのくらいは容易いわよっ！」
レミリアとパチュリーは避け着地するや否やレミリアはカエサルに作り出した紅槍を、パチュリーはメビウスへと魔法を放つ
しかしメビウスは輪を、カエサルは召喚した身の丈程もある巨大な大盾で防ぎきった
パ「へぇ…その帯、触れた物のエネルギーを問答無用で無効化してるのかしら？」
メ『おや、まさか一目で見抜かれるとは思いませんでしたね』
パ「伊達に魔法使いをしている訳じゃないわよ、相手の攻撃を無効化する手段に考えた事があったからね
だから…その弱点も分かるわよ？」
パチュリーがそう言いながらメビウスに向かい手を振るとメビウスの周囲に無数の火球が現れる

そしてそれらの火球は素早くメビウスへと襲いかかり
メ『ぐっ…おぁぁぁ！』
カ『メビウスッ！』
その火球を受けきれずその身に喰らったメビウスは意識を失いその体を地に伏せた
レ「よくやったわパチェ！」
レミリアはメビウスが倒され動揺を隠せずにいたカエサルの背後に周ると持てる力全てを注ぎ込みその手に槍を創り出した
カエサルはその槍を構えた大盾で防ぐも段々と亀裂が入っていき…
レ「う…りゃぁぁぁ！」
カ『ぐっ……！』
力を振り絞ったレミリアの槍に貫かれカエサルもその身を床に伏せた
パ「勝った…かしら？」
レ「まだよ、ヘイヘとか言うスナイパーは…」
咲「ご安心を、すでに仕留めてきましたので」
そう言いながらその場に咲夜が現れる、その傍らには気絶させられぐるぐる巻きにされたヘイヘらしき真っ白なコートに身を包んだ男がおり…
レ「咲夜…さすがね、メイド長なだけの事はあるわ」

咲「それほどでもありません、時を止め接近すれば近距離に弱いスナイパーを捕縛する事は容易でしたので」

？『なるほど、やはり時を止められてはスナイパーも打つ手無し…か

ここは撤退一筋だな』

レパ咲「「!?」」

カキンッという音と共に響いた声に警戒しつつ3人は倒れたメビウスとカエサルへと視線を向ける

そこには先日博霊神社にも現れたスーツの男、アインシュタインが立っていた

レ「あら、増援かしら?

今更1人増えても無意味ってものよ?」

ア『残念だが私は増援で無いよ、どちらかと言えば回収役だ』

戦意むき出しに言葉を紡ぐレミリアを傍目にアインシュタインは倒れ気を失っているカエサル達を自身の周りに引き寄せると静かに口を開く

ア『この場は撤退させてもらうよ、次の襲撃日は…明かさないでおこう』

そう言い残すとアインシュタイン達リィンカーネションの面々はその場から消えたのだった…

13話　竹林の戦い

紅魔館にてリィンカーネーションの襲撃者との戦いが繰り広げられてから数日、藤原妹紅はいつも以上に警戒しつつ雨上がりの竹林を見回っていた

「博霊神社に紅魔館と来て次の襲撃地も日程も不明のまま…

いつもより気を引き締めて見回っておかないと…！」

妹紅が気合を入れ直していると不意にその背筋へ寒気に似た感覚が襲ってきた

「殺気っ…!?」

妹紅がそれに驚き咄嗟にその場から飛びのくと先まで立っていた場所に数本のナイフが突き刺さった

「っ…誰だっ！」

妹紅は近くにあった岩の上へ着地しつつ上を見上げ叫ぶように声を上げた、すると張り巡らされたロープの上にピエロのような見た目の男がナイフジャグリングをしながら笑っていた

『ヒョホホッ！

今のナイフを避けるとはネ、中々に勘が良いじゃないカッ！』

「お前は誰だ？
　もしかしてお前がリインカーネーションとかいう連中の仲間か？」
『当たりダヨ、私がこの竹林への襲撃者の一人サッ！
　名はジョン・ゲイシー、気軽にゲイシーと呼んでくれたまえヨ！』
「そうか、ならゲイシー…今のナイフもお前が？」
『そのとおりサ、私のＣｉｒｃｕｓ（サーカス）を楽しんでくれたまえヨ！
　とはいえ私ばかりでは味気ない、仲間を紹介しようじゃないカッ！』
　ゲイシーがそう言うと共に妹紅の背後の岩陰から人影が飛び出す
『ヘアァッ！』
「危なっ…！」
　そしてその人影はその手に生えた長く鋭い爪を使い妹紅へと斬りかかるも妹紅は間一髪その場を飛びのき回避した
『悪いなぁ…いきなり斬りかかってよ
　だが謝りはしないぜ、悪だからなっ！』
『紹介するヨ、今回の襲撃チームの一員…アンドレイ・チカチーロ
　チカチーロと呼んでやりたまえヨ！』
『よろしくなぁ!?

俺の爪は痛いしよく斬れるぜぇ、お嬢ちゃん！』
「あぁよろしく…それで？
お前らは3人で襲撃するらしいじゃないか…もう1人は？」
辺りを警戒しつつ問いかける妹紅、するとその背後から突如として凄まじいまでの速さで何かが迫って来る
それを間一髪察し避けた妹紅、しかし反応が遅かったか片腕をその何かによって斬られ浅くない斬り傷を負ってしまった
『ほう、今のを避けるか…
手加減していたとはいえそれなりの速度は出ていたはずなのだが』
妹紅が急ぎその声の主を見るとそこにはまるで馬のような下半身に爪に血を滴らせる鷲のような腕を持った白髭を伸ばした老人が立っていた
「お前が3人目の襲撃者か…？」
『いかにも、我が名はダーウィン…
そこの2人と同じリインカーネーションの襲撃者だ』
「へぇ、その姿を見る限り変身の能力持ちか？」
『変身などという陳腐なもので片付けて欲しくは無い…進化と言ってもらおうか
複眼があればお前さんの動きなど止まっているも同然だし偶蹄類の脚力があれば速

さにおいて遅れを取ることは無く、肉食目の腕力に猛禽類の爪があれば人の身など実に脆い…！

自身が望むままに進化出来る才能、それこそが我が才能〈進化論〉！

我が才能に淘汰されるが良い劣等種！』

妹紅は自身の問いかけへの答えを聞きつつ襲撃者である３人を見据えながらいつでも戦えるよう構え始める

ソレを見た襲撃者３人もそれぞれナイフを持ち、爪を擦り合わせ、自身の姿を変化させて戦闘に備え始めた

そのまま睨み合い数分が過ぎた頃、互いの間にある水溜りへと一滴の雨粒が滑り落ち戦いの火蓋は斬り落とされた

「燃え尽きろっ！」

『〈殺人道化芸（キリングフリング）〉！』

『斬り裂かれなぁっ！〈赤い切り裂き魔〉！』

『淘汰されよ劣等種！〈進化論〉！』

妹紅は小手調べと辺りに引火しないよう気をつけながら炎を撒き散らしつつその場から飛び出していった

そんな妹紅の動きを追うかのように妹紅が動き退いた側からゲイシーのナイフが線

を描き刺さっていく、そのナイフを避け続ける妹紅を足止めするかのようにチカチーロは1m程ある爪で斬りかかりダーウィンは妹紅の腕を狙った時と同じように突っ込みその腕を伸ばしていた
「捕まってたまるかっ！」
『ぐぁっ!?』
『ぐぉっ！』
　しかし妹紅はダーウィンの手を避け腕を掴むとそのまま投げの要領でダーウィンとチカチーロを衝突させ、それを盾にナイフを避けその場から飛びのいた
『なかなかやるネ！
　常人じゃダーウィンのスピードを捉えは出来ないだろうに』
「生憎と遠い昔に常人止めたんでなっ！」
『そりゃ不死者を常人とは呼ばねぇよなぁ…！』
『まったくだ…劣等種ではなく異常種と呼ぶべきだったか』
　言いながら未だ高く張られたロープから降りずにいるゲイシーと睨み合い出方を伺う妹紅
　しかしいつの間にやら復帰したチカチーロとダーウィンに囲まれていた
「くそっ…囲まれたか」

『逃げ道は塞がせてもらったぜ、悪だからなっ！
もっとも逃げる気も無いだろうがな！』
『逃げ道を塞いだは良いが…先のようになってもいかん、攻めあぐねるな』
言いながら様子を見る襲撃者達、しかしそれは妹紅も同じであった
（不味いな…
目の前の二人だけなら大したことないがあの道化師（ゲイシー）のナイフが厄介だ、アレのせいで動きが制限される…
なんとかアイツだけでも始末出来ないか…？）
その時、辺りを伺う妹紅の目にゲイシーが足場としている縄が入る
「あれだっ…！」
その縄を見て策を思いついた妹紅
睨み合っているダーウィン、チカチーロの２人に火球を投げつけ牽制する
それと同時にゲイシーが立つ縄の端、竹に結び付けられた辺りへと火事を起こさぬよう加減した炎を打ち上げた
『ヒョホッ…!?』
狙いは的中し炎は縄を焼き切った、それと同時にゲイシーは足場を失い真っ逆さまに墜ちてくる

「まずは1人っ…！」
『ヒョッホォオオ!?』
妹紅はすかさず落下するゲイシーへと飛びかかると炎を纏わせた拳で殴り掛かり吹き飛ばす
炎を直接叩き込まれ吹き飛ばされたゲイシーは2度3度と地面を跳ねていき焦げた衣装から煙を上げつつ気絶した
「さぁ…次はどっちだ!?」
『ふむ…よもやゲイシーがやられるとは思ってもいなかった』
『だがやられた仲間を心配したりなんかはしないぜ、悪だからなっ！』
気絶したゲイシーと妹紅とを見ながら再度構えるダーウィンとチカチーロ、そのまま再度挟み込むように飛びかかるもゲイシーのナイフによる牽制が無くなった今となっては妹紅を捉える事は出来ずに回避を重ねられていく
相手を捉えようと必死に攻撃を重ねる者とそれを最低限の動きで軽やかに回避する者、疲弊は明らかに前者にのみ溜まっていた
「そろそろ退場しなぁ！」
『『ぐはっ!?』』
妹紅は疲弊が溜まり動きが鈍くなった二人に出来たスキを見逃すことなく炎を纏わ

せた拳を思い切り叩き込みそのまま思い切り吹き飛ばした

地面を転がり跳ねていく二人はそのまま気を失い竹林での戦いは幕を降ろしたのだった